様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 27 日現在

機関番号：14501
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2011～2012
課題番号：23820030
研究課題名（和文）ロマン主義における信仰対象の変容と『ドイツ伝説集』の精神史的と特性
研究課題名（英文）A study of the tradition of German beliefs in the Romantic era and the mentality of Grimm brothers' German Sagas

研究代表者
植　朗子（UE　AKIKO）
神戸大学・大学院国際文化学研究科異文化研究交流センター・協力研究員
研究者番号：20611651

研究成果の概要（和文）：本研究は、ドイツ精神文化史において、グリム兄弟のコスモロジー（宇宙観）がどのような位置づけにあるのか解明することを試みたものである。『ドイツ伝説集』は、ドイツの説話伝承文学史上、重要な位置にありながらも、その構成が意図的なされたものでないとの誤解をうけたことよって、伝説の配列は充分に把握されていなかった。そこで伝説各話の配置に関する概念と、ロマン主義の詩的精神の関係性について論じるために、超自然的な力を持つモティーフの問題を検討した。

研究成果の概要（英文）：This study was an attempt to reveal the cosmology in Grimm brothers' German Sagas and locate it in the history of German spiritual culture. Hitherto there has been not sufficient researches of German Sagas as narrative literatures because it has been considered a mere farrago lacking a consistent theme. In order to consider connections between the conceptions of the arrangement and the poetic spirit in German Sagas, I have examined the motifs of supernaturalism.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2011 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2012 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）
キーワード：ドイツ文学、伝説、神話、グリム兄弟、ドイツ・ロマン主義、配列

１．研究開始当初の背景

研究開始当初、『ドイツ伝説集』を主たる対象とした研究は、ドイツ本国およびわが国において盛んとは言いがたい状況であった。グリム研究において、メルヒェンの補助資料的な扱いを受けていた『ドイツ伝説集』に光をあて、その精神史的内実を明らかにしたいということが、本研究の動機である。

研究対象を『ドイツ伝説集』に決定した理由は、以下の４点による。

（１）『ドイツ伝説集』はドイツ民俗学という新たな学術分野誕生の契機となった作品

にも関わらず、文学的観点からの研究は、未だ不十分とされている。
配列と構成に関するグリム兄弟の手法を明らかにすることによって、『ドイツ伝説集』の精神的内実を解明したいと考えた。

（２）第二次世界大戦以降、ドイツナショナリズムとの関係性の指摘によって、ゲルマン神話および伝説に関する研究が停滞し、『ドイツ伝説集』の研究もドイツ本国では、単なる伝承の一資料として見なされることが主となった。
わが国では近年、『ドイツ伝説集』に対する論考が増えてきてはいるが、伝説集の全体構成について論じたものはない。そのため、本研究において、『ドイツ伝説集』の配列手法から全体構成を論じることを目指した。

（３）ドイツ語圏に伝わる民間伝承には、キリスト教的なモティーフと、自然信仰あるいはゲルマン神話に関するモティーフがみられる。
特に「正統派キリスト教」への揺らぎが噴出した19世紀ロマン主義における作品の中で、「民衆に事実と信じられてきた話（＝伝説）」を題材に、彼らの精神の変革を明らかにしたいと考えた。

（４）民間伝承には、神話・メルヒェン・伝説の３つのジャンルが存在する。
グリム兄弟は兄・ヤーコプと弟ヴィルヘルムが、それぞれのジャンルに関する単著と共著を残している。同一研究者による神話・メルヒェン・伝説の作品集を比較することによって、伝説の特性により接近したいと考えた。
なおここでいう伝説とはザーゲ sage を指す。

２．研究の目的

本研究の目的は、19 世紀初頭、グリム兄弟が編纂した『ドイツ伝説集』を研究対象として、ドイツ語圏における精神の変革の実相を解明しようと試みたものである。

（１）グリム兄弟の『ドイツ伝説集』における「コスモロジー（宇宙観）」を明らかにすることを目的とした。『ドイツ伝説集』は２巻本であるが、第１巻には土地に関する伝説、第２巻には歴史に関する伝説が収録されている。土地伝説は空間を歴史伝説は時間を示しており、伝説が生み出された自然や宇宙のエレメントが表現されている。その表現手法として、伝説のモティーフと配列に注目した。

（２）『ドイツ伝説集』における民衆の信仰対象の変遷から、ドイツ語圏の精神の変革の実相を解明する。ヨーロッパ近現代の精神史上の問題と関連する「正統派キリスト教」への揺らぎを伝説研究の立場から解明しようと試みた。

３．研究の方法

（１）『ドイツ伝説集』に関連する類話の蒐集と現在のドイツ民俗学分野におけるモティーフの分類手法の調査。

平成23年度は『ドイツ伝説集』に収録されている伝説の類話の調査を行った。ドイツ本国においても、『ドイツ伝説集』の類話研究とその比較は、ごく限られた数種類のモティーフ研究に留まっており、グリム研究において調査が進んでいない分野といえる。

南西ドイツのフライブルク市のヨハネス・キュンツィヒ・インスティテュート Johannes-Künzig-Institut für ostdeutsche Volkskunde in Freiburgにある「フライブルク・ザーゲ資料所」Freiburger Sagenarchiv の伝説分類の表を入手し、実際に伝説分類棚に収められている伝説が、記録されているメモがその表の分類基準にそっているか、伝説の内容から確認した。

（２）『ドイツ伝説集』における正統派キリスト教の信仰に関わるモティーフと異教的・異端的なモティーフの比較。

ヨーロッパ文化の深層に隠されている「異教的・異端的なもの」をドイツ語圏の伝説研究の観点から解明するために、ゲルマン民族の移動期から宗教改革までのドイツ語圏の伝説を含む『ドイツ伝説集』に見られるモティーフについて取り上げた。
ヤーコプ・グリムの『ドイツ神話学』やノヴァーリス、ハイネなどの作品との比較によって具体例を示し明らかにした。具体的には、死体と魂に関するモティーフを比較対象とした。

４．研究成果

（１）海外渡航調査の成果

平成23年（2011年）10月16日から、ドイツの伝説に関する調査とドイツ民俗学研究者と

の意見交換を目的に、ドイツ南西部のフライブルク市を中心に資料収集のため渡航した。

ドイツ語圏と近接する国々の膨大な伝説を集めたグリム兄弟は、『ドイツ伝説集』の名にふさわしいと彼らが考える伝説を抽出し、それをひとつの伝説集として再構築したが、第二次世界大戦以降、ドイツナショナリズムの問題と「新しい神話」運動の関連が指摘され、『ドイツ伝説集』についても、現在は『グリム童話集』研究の一資料としての取り扱いしかされていないのが現状であった。

渡航先であるヨハネス・キュンツィヒ・インスティテュートにある「フライブルク・ザーゲ資料所」には、『ドイツ伝説集』をはじめとする19世紀から20世紀に編纂された種々の伝説資料が数多くある。

この資料所の責任者であるミヒャエル・プローサー＝シェル氏と、創立者である故ルッツ・レーリヒ氏の共同研究者であったゲルトルート・マイネル氏のご厚意によって、貴重な資料を写すことができた。この資料所に所属されている研究者たちの専門領域は、ドイツ民俗学であり、『ドイツ伝説集』資料が文学的な研究対象として重視されていないことを確認した。伝説の分類棚には、未だ整理されていない伝説メモが残されており、現在では、伝説の表現部分の詳細については、研究の対象とされていないことが分かった。

しかし、ルッツ・レーリヒによって集められたドイツ語圏の伝説の断片には、『ドイツ伝説集』に収録されている伝説も含まれ、モティーフによる分類は完成している。ルッツ・レーリヒによる伝説の分類として、彼はまず全ての伝説を怪異モティーフの名称ごとに細かく区分し、そこから

①デーモンに関する伝説、

②死者に関する伝説、

として２つに大別していた。この伝説分類方法は、ドイツ民俗学者のレアンダー・ペッツォルトと共通するものであり、ドイツ民俗学におけるモティーフ研究に踏襲されているものであるが、グリム兄弟の『ドイツ伝説集』の配列には、当てはまるものではないことが分かった。

ドイツ民俗学の祖と呼ばれるグリム兄弟は伝説を分類・整理していたが、『ドイツ伝説集』の編纂においては、民俗学的に分類区分の境界を全面に押し出すことはなかった。伝説集については、伝説同士の関連性を意識しており、伝説の配列の際には、関連し合う伝説同士を近くに配置していたことが分かった。この配列手法は、怪異のモティーフを検索する際には、活用しづらい面があるが、異なる怪異を主題にした伝説同士に横たわる共通要素が浮かび上がる仕組みを持っている。

（２）ワーグナー作品との比較

異教的・異端的なモティーフと正統派キリスト教に関するモティーフの比較として、死体と死者の信仰に関する伝承を取り上げた。

1842年にワーグナーによって書き上げられた歌劇『ファールンの鉱山』はE.T.A.ホフマンの作品を題材としているが、もともとこの話は、18世紀にスウェーデンのファールン鉱山地帯で起きた実話を土台としており、当時広く知られていた。落盤事故に巻き込まれた若き坑夫が、〈腐らない遺体〉として、婚約者の元へ帰還した伝説である。

鉱山という危険が伴う作業場には、事故とそれにまつわる怪異に関する伝説が残されており、グリム兄弟が編纂した『ドイツ伝説集』には、ボヘミアのクッテンベルク鉱山で生き埋めになった3人の男が７年間生き続けていた話がおさめられている。

この2つの類話の相違点は、生き埋めになった人物の信仰心にある。『ドイツ伝説集』の３人の鉱夫は鉱山に向かう際に、毎回神に祈りを捧げ、作業場にも祈祷のための本を持参している。一方で『ファールンの鉱山』の主人公は、地下世界の案内人として描出されている異界の存在に、地上を離れることを願っている。これらは人間が生きたまま異界へと踏み込み、長い時間を過ごして、この世へ帰還する物語であるが、ワーグナー作品である『さまよえるオランダ人』もまた〈死なない男〉を題材としている。さすらうことを余儀なくされたオランダ人は、神に呪いの言葉を吐いたことによって、海という異界に閉じ込められてしまうこととなった。

ワーグナーは神話や伝説に作品の題材を求め、グリム兄弟の著作や編纂書、そして論文を読み、同じく神話や伝説を源泉とする他のロマン主義作家たちの作品を参考にしていた。これらの作品では、神と人、信仰と逃避という行動の在り方が、類話の中で異なる効果を生み出していることが明らかとなった。

（３）今後の展望

本研究によって、『ドイツ伝説集』の配列手法から、グリム兄弟による伝説のコスモロジーを構成する要素を論じることができた。また異端的・異教的モティーフとキリスト教的モティーフが、『ドイツ伝説集』の構成上、

どのような役割をおっているかについても明らかにした。

今後は、ドイツ語圏の伝承学会およびグリム研究会に、配列研究から解明できたモティーフの理解について、論文を投稿し、その内容を発表したい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

①植　朗子、グリム兄弟『ドイツ伝説集』の土地伝説集における配列、阪神ドイツ文学会誌『ドイツ文学論攷』
査読有
第 53 号
2011、31-54

〔学会発表〕（計１件）

①植　朗子、『ドイツ伝説集』における薬用植物・魔術的植物の効用について
日本メディカルハーブ協会
ブラッシュアップセミナーin 東京 2012（講演）2012.11.25　東京

〔図書〕（計１件）

①　植　朗子
鳥影社
グリム兄弟『ドイツ伝説集』のコスモロジー
-配列・エレメント・モティーフ-
2013、143

６．研究組織

(1)研究代表者
植　朗子（UE AKIKO）
神戸大学・大学院国際文化学研究科
異文化研究交流センター・協力研究員
研究者番号：20611651

(2)研究分担者
個人研究のため、研究分担者はいない

(3)連携研究者
個人研究のため、連携研究者はいない